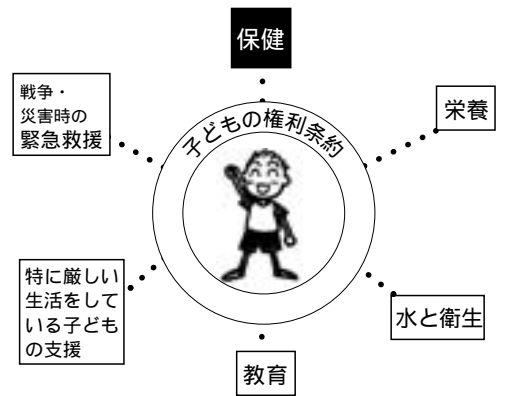


基礎講座

UNICEF

「ユニセフって募金を集めて困っている人にお金をあげているんでしょう？」
 「ユニセフは飢えて死にそうになっている人に食べ物を届けているんだよ.....?」
 ユニセフへの協力活動を積極的に行ってくれている小・中学生でもユニセフの基本的な活動について答えることはなかなか難しいようです。
 ユニセフは現在145の国ぐにで活動しています。今号よりシリーズでユニセフの基本的な活動についてお伝えします。



第1回 保健

1 予防接種

ジフテリア、はしか、百日せき、破傷風、結核、ポリオ.....これらの病気は予防接種で防ぐことができます。でも予防接種が受けられなかったために病気になって、毎年200万人以上もの子どもが5歳になるまでに亡くなっています。ユニセフは、すべての子どもが予防接種を受けられるようにワクチンを提供したり、注射をする保健員さんを育てたりしています。



2 身長・体重測定

子どもが健康にすくすくと育っているかな？身長測定や体重測定をすれば一目で分かります。もし3ヶ月間ずっと体重が増えていなければ、栄養が足りていなかったり、病気になっていると考えられます。子どもの栄養不良を早く見つけて処置できるように、ユニセフはこの方法を広めています。



3 母乳で赤ちゃんを育てよう!

赤ちゃんにとって一番の栄養は母乳です。母乳は赤ちゃんを病気から守る力もあります。でも粉ミルクがいいという宣伝を信じて、高価な粉ミルクを薄めて飲ませたり、汚れた水で粉ミルクをとくしたりするおかあさんがいます。そのためにたくさんの赤ちゃんが栄養不良やげりになっています。ユニセフは、母乳のすばらしさを伝えて、母乳で赤ちゃんを育てようと呼びかけています。



COLUMN 1 1年間に1200万人、1日に3万3千人、2秒に1人.....一体何の数字でしょう。これは5歳になる前に亡くなってしまふ子どもの数を示しています。多くはかぜをこじらせた肺炎や、げりによる脱水症などが原因です。簡単な保健の知識やくすりがあれば守れる命なのです。

COLUMN 2

ラオスのシェンクアン県のおかあさんの村。月1回、予防接種の会場となるお寺にはたくさんのおかあさんと赤ちゃんが集まってきました。この村の2人の保健員さんがおかあさんの持ってきた「予防接種記録手帳」を見ながらときばきと予防接種をしています。

この地域のユニセフ保健担当官はこの1年、毎日のようにお寺から何キロも山に入ったところにある村むらを歩いて回り、予防接種の大切さを村人に話して回りました。文字の読めない人のために紙芝居や人形劇をしたり、村長さんを説得したり...はじめは注射なんて、ととまどってなかなか来てくれなかったおかあさんも、今ではまわりのおかあさんを誘って子どもたちをつれて来てくれるようになったのです。

4 くすりを住民が管理できるように

かぜをこじらせたり、けがをしたときに必要なのはくすりです。でも、病院や保健センターが近くになく、くすりを手に入れられないのでは困ります。ユニセフは、くすりを提供していますが、同時に、地域の人びとが自分たちの力でくすりを販売・管理し、常に必要なくすりを使えるようにアドバイスしています。



5 脱水症から命を救う ORTを広めること

水道や井戸のない多くの地域では川や池の水を使って生活しています。このような水は安全でないことが多く、げりの原因になります。ひどいげりは、子どもを脱水症にし、多くの命を奪います。ユニセフは、脱水症から子どもを守るために、湯まじり1リットルに小さじ8はいの砂糖と小さじ1はいの塩を溶かしたものを飲ませる経口補水療法(ORT)を広めています。

